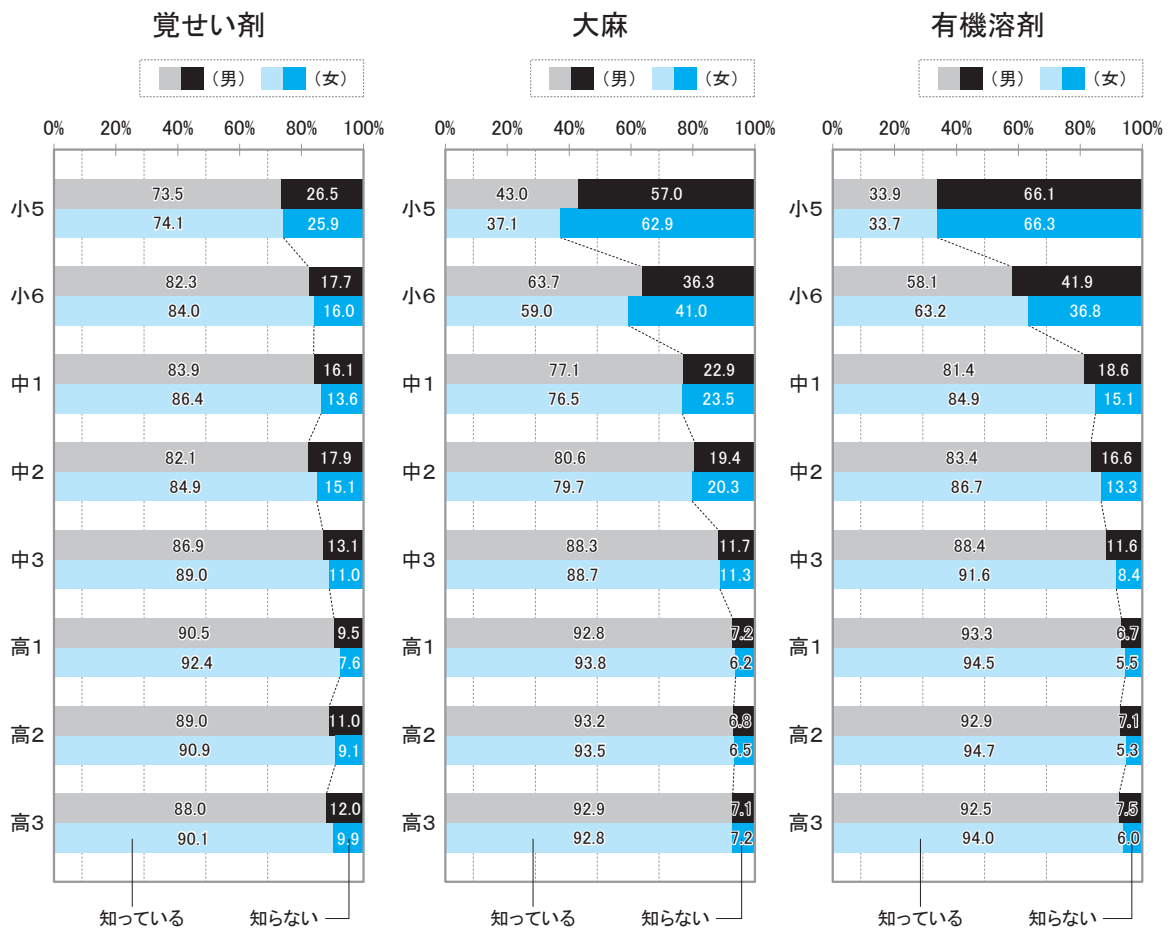


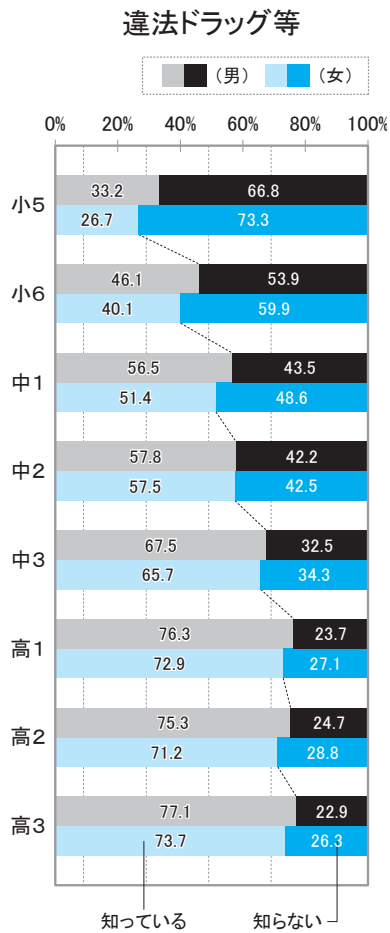
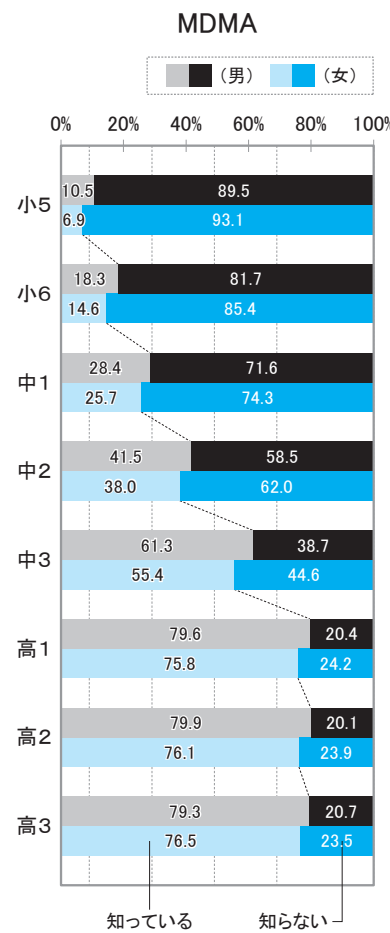
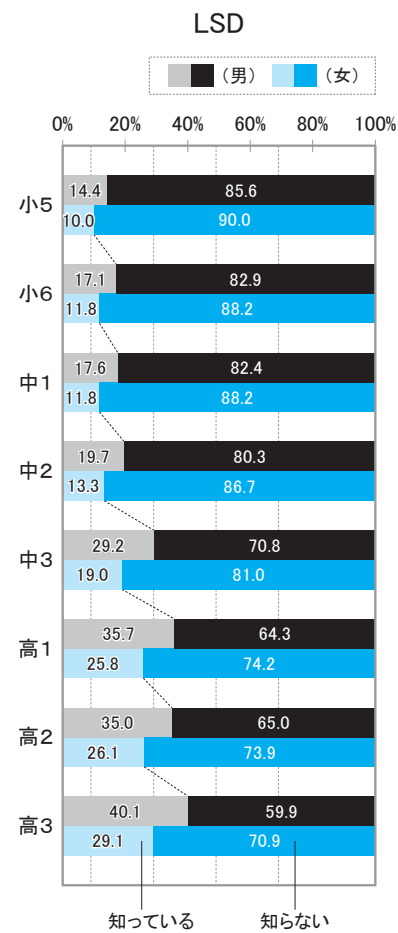
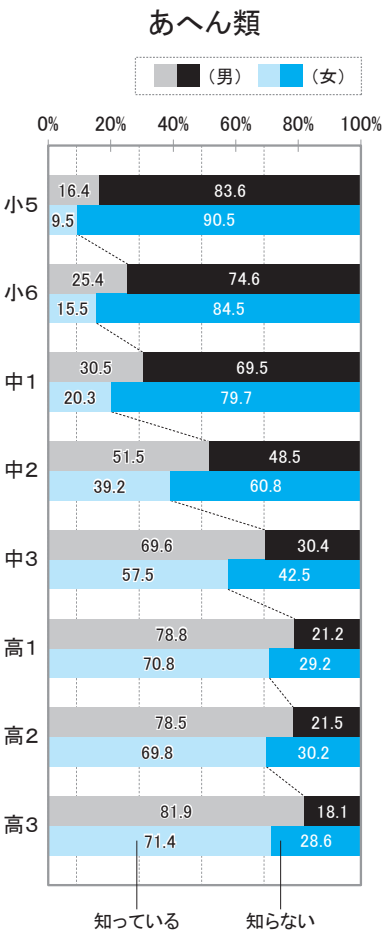
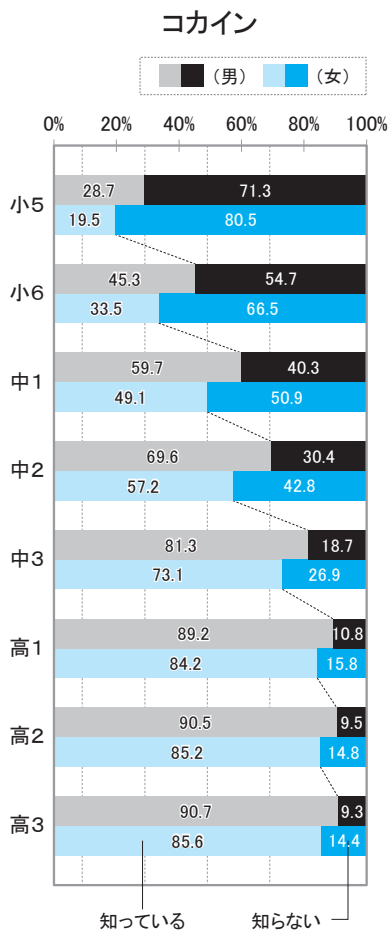
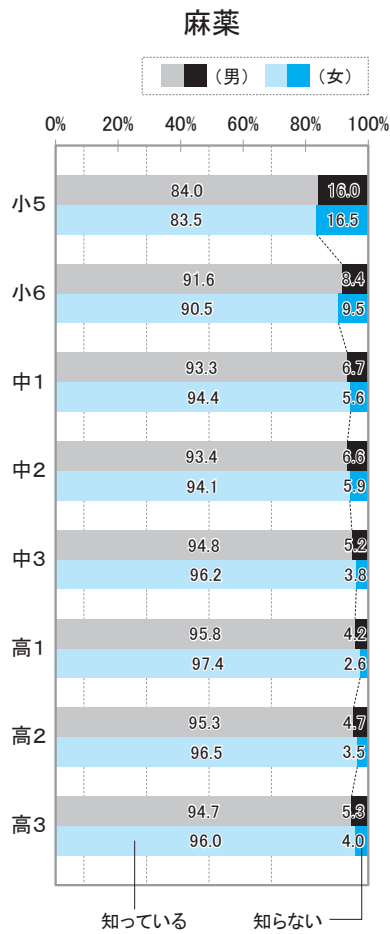
## 4 薬物についての質問

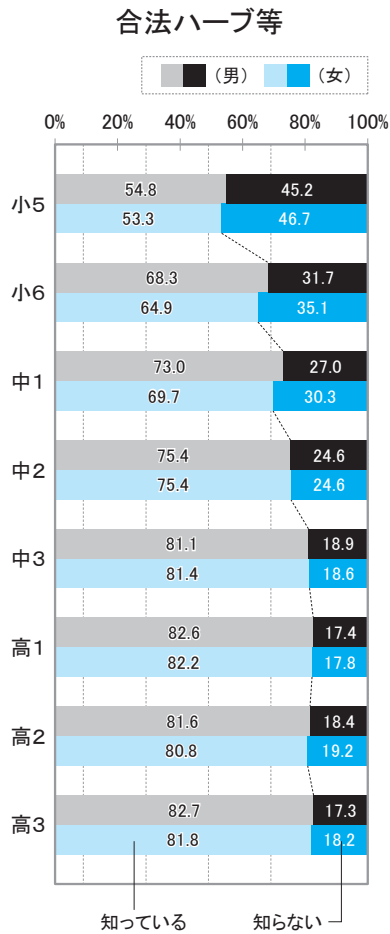
### (1) 知っている薬物の名前

- 例示されたいずれの薬物の名前についても「知っている」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなる傾向が認められた。
- 男女ともに高等学校1年生段階で概ね90%以上の生徒が名前を「知っている」と回答した薬物は、「覚せい剤」、「大麻」、「有機溶剤」、「麻薬」であった。次いで80%以上の生徒が「知っている」と回答した薬物は、「コカイン」、「違法ハーブ等」であった。他の薬物と比較して「LSD」を知っていると回答した児童生徒の割合が最も低く、高等学校3年生男子で40.1%、女子で29.1%であった。
- 「あへん類」、「LSD」については、いずれの学校種・学年においても、男子の方が女子よりも「知っている」と回答した児童生徒の割合が高かった。

図Ⅱ-4-(1) 薬物の名前を「知っている」と回答した児童生徒の割合







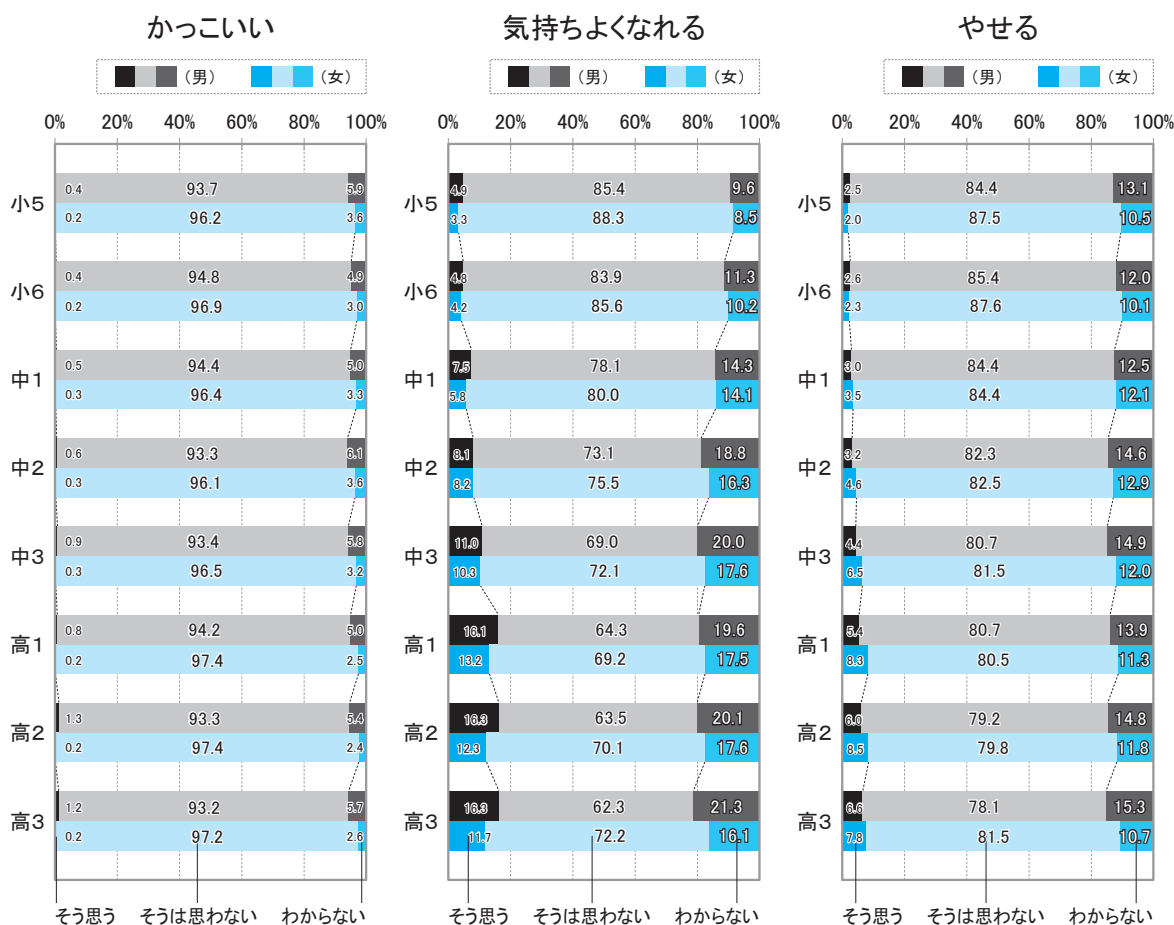
## 【参考】

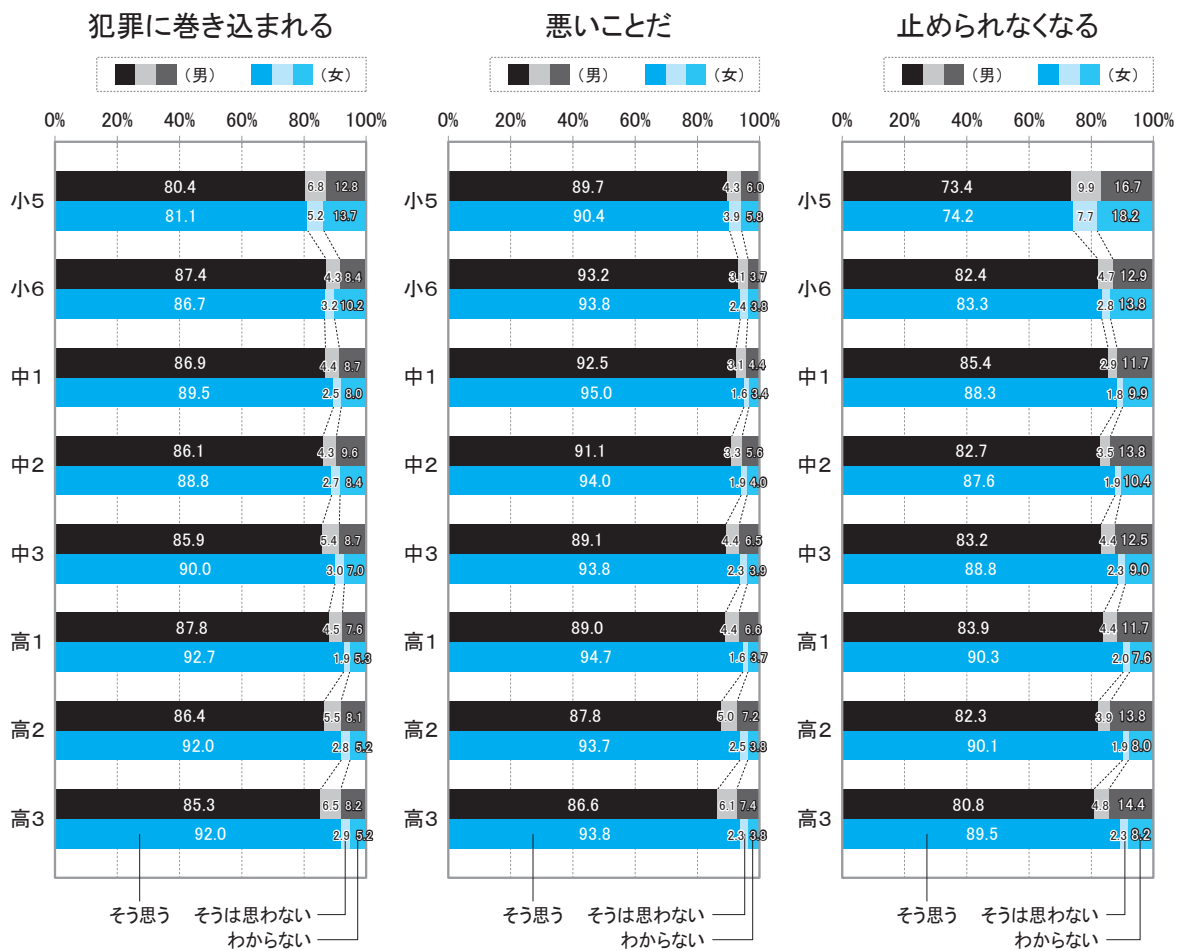
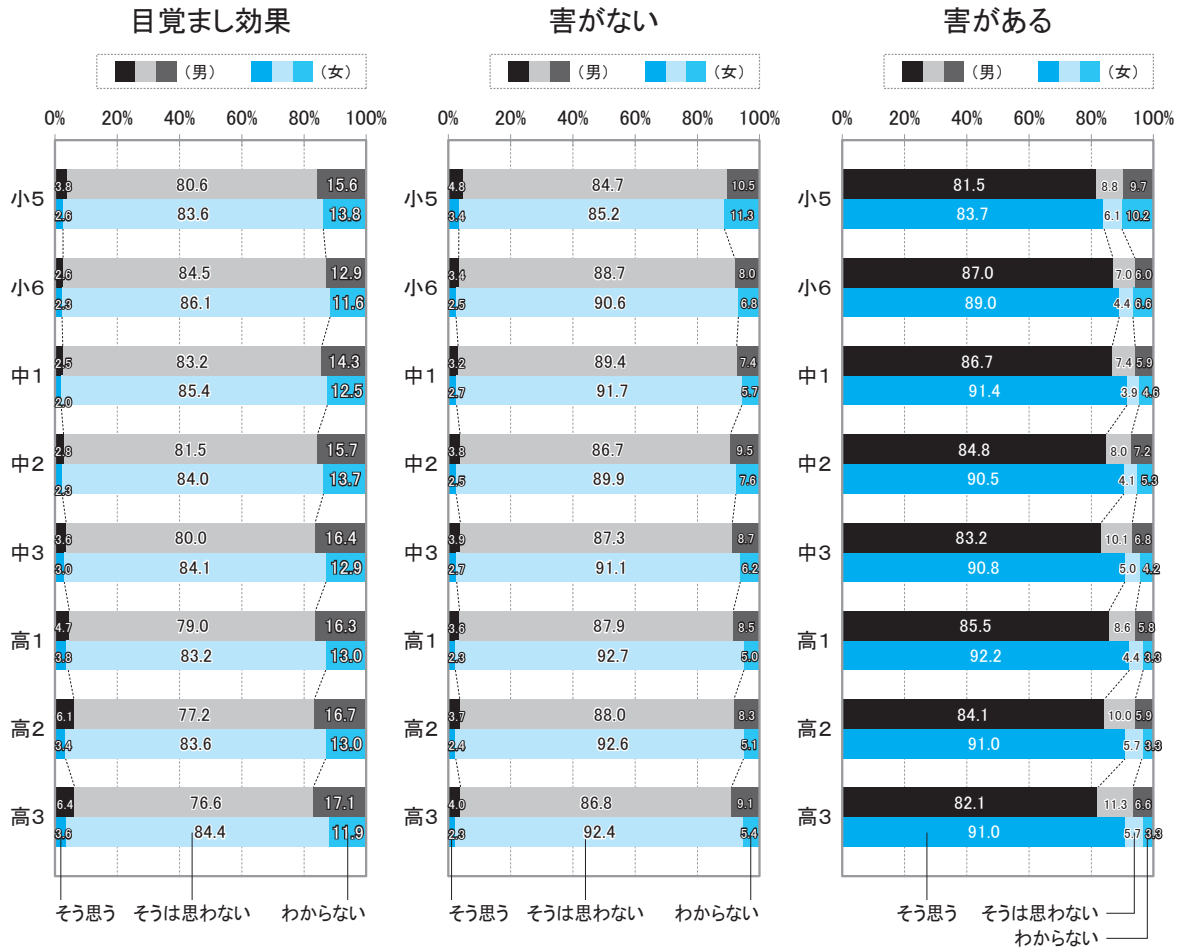
- 平成9年、平成12年及び平成18年に実施した調査では、複数ある薬物の名前の中で知っているものを選択する質問になっていたが、今回の調査では、それぞれの薬物の名前を「知っている」か「知らない」の二者択一とした。したがって、今回の調査結果と過去の調査を比較することはできないことから、過去の調査における知っている薬物の名前に関する結果（第2章 p 103【参考5】参照）を参考として示す。なお、「MDMA（エクスタシーなど）」及び「いわゆる脱法ドラッグ」は、平成18年の調査で新規に追加された選択肢である。

## (2) 薬物についての印象

- 薬物に対して肯定的な印象である「かっこいい」、「気持ちよくなれる気がする」、「やせるのに効果がある」、「眠気覚ましに効果がある」、「1回使うくらいであれば、心や体への害はない」と思うと回答した児童生徒の割合は、男女とも概ね学校種・学年が上がるにつれて高くなる傾向が認められた。
- 肯定的な印象の内、「気持ちよくなれる気がする」と思うと回答した児童生徒の割合が、男女ともにすべての学校種・学年で最も高く、中学校3年生以上では10%を超えていた。また、「やせるのに効果がある」と思うと回答した児童生徒の割合は、女子の方が男子より高かったが、それ以外は男子の方が女子より高かった。
- 薬物に対する否定的な印象である「心や体に害がある」、「犯罪に巻き込まれる」、「使ったり、持っていたりするの悪いことだ」、「1回でも使うと止められなくなる」と思うと回答した児童生徒の割合は高く、男女ともに高等学校1年生段階で概ね85%以上であり、女子の方が男子より高かった。

図II-4-(2) 薬物についての印象





#### 【参考】

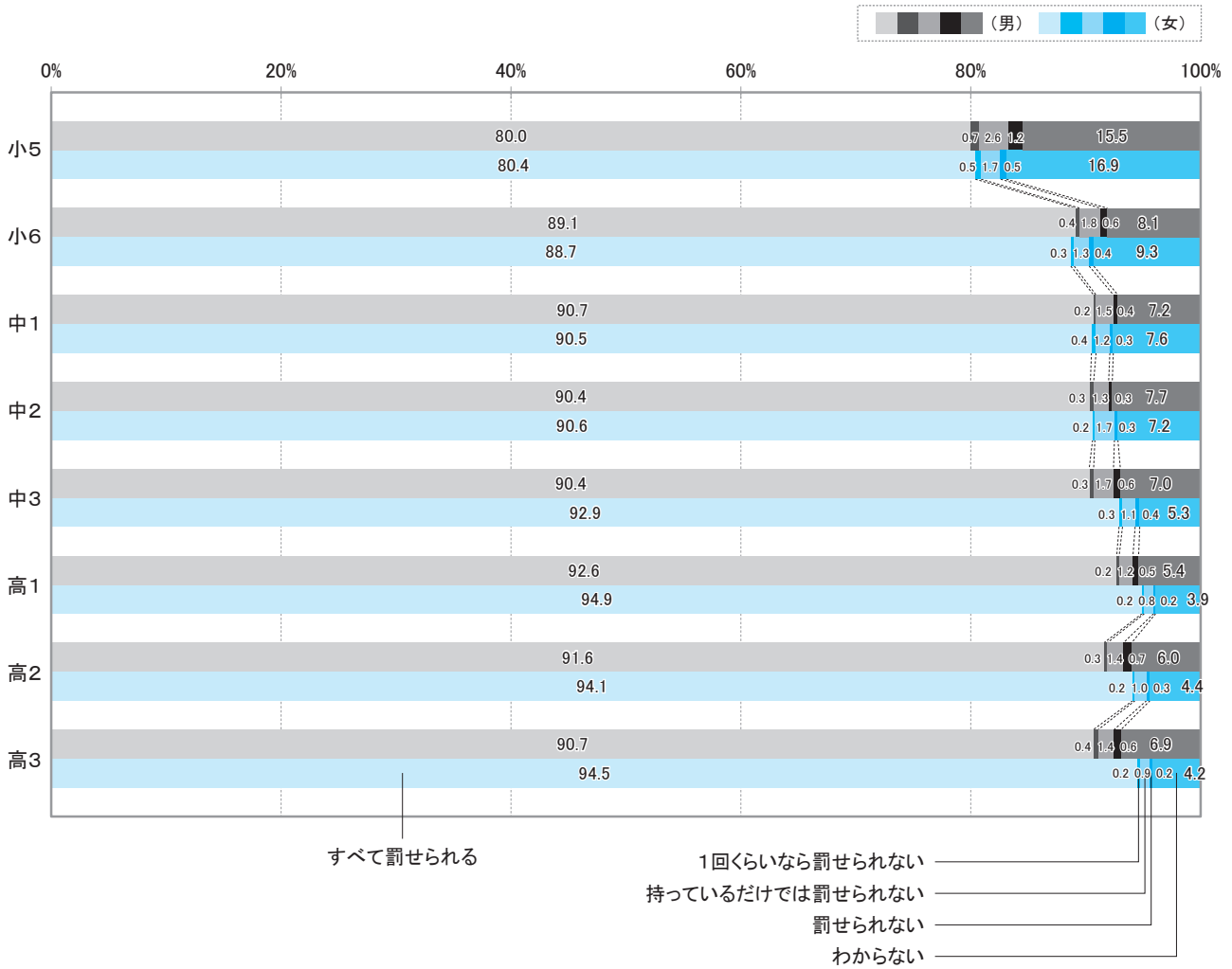
- 平成9年、平成12年及び平成18年に実施した調査では、複数ある薬物への印象について「そう思う」ものを選択する質問になっていたが、今回の調査では、それぞれの印象について「そう思う」、「そうは思わない」、「わからない」から一つ選択することとした。したがって、今回の調査結果と過去の調査を比較することはできないことから、過去の調査に薬物についての印象に関する結果（第2章 p 110【参考6】参照）を参考として示す。

### (3) 罰則についての認識

---

- 他の回答と比較して覚せい剤などの薬物を使ったり、持っていたりしたら「すべて罰せられる」と思うと回答した児童生徒の割合は、男女ともにすべての学校種・学年で最も高かった。また、その割合は、中学校2年生までは男女間で大きな差が認められなかったが、中学校3年生以降は女子の方が男子より2～4ポイント程度高かった。
- 「すべて罰せられる」と思うと回答した児童生徒の割合は、男女ともに高等学校1年生までは学校種・学年が上がるにつれて高くなり、それ以降低くなった。一方、「わからない」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに高等学校1年生までは学校種・学年が上がるにつれて低くなり、それ以降高くなった。
- 「1回くらいなら、罰せられない」、「持っているだけでは罰せられない」及び「使ったり、持っていたりしても罰せられない」と思うと回答した児童生徒の割合は、男女ともにいずれの学校種・学年でも低かったが、学校種・学年が上がるにつれてわずかであるが高くなる傾向が認められた。

図 II -4-(3) 罰則についての認識



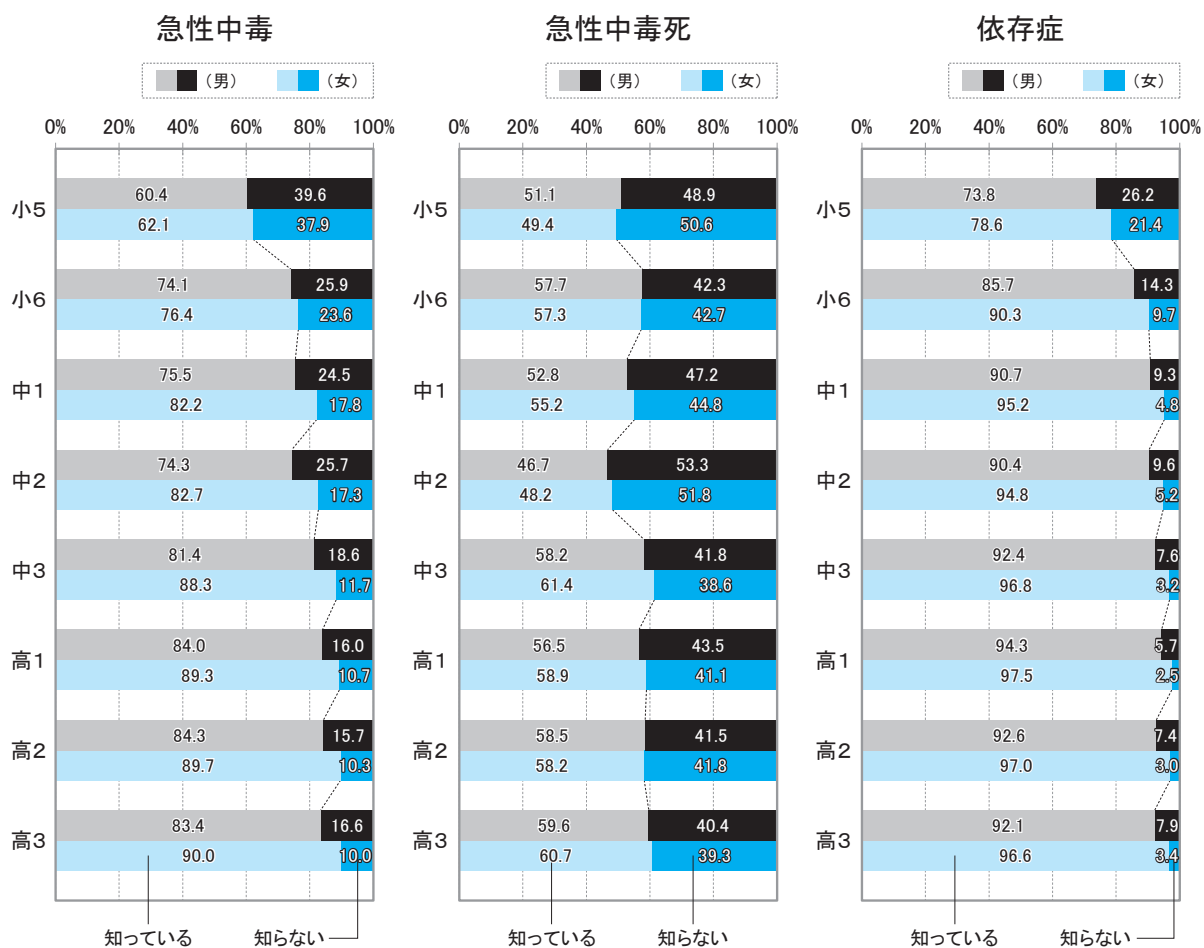
【参考】

●平成9年、平成12年及び平成18年に実施した調査では、複数ある罰則の認識について  
 そう思うものを選択する質問になっていたが、今回の調査では、一つ選択することとした。  
 したがって、今回の調査結果と過去の調査を比較することはできないことから、過去の調  
 査において罰則について正しい認識をもっていた児童生徒の割合（第2章 p 113【参考7】  
 参照）を参考として示す。

## (4) 薬物の健康影響についての認識

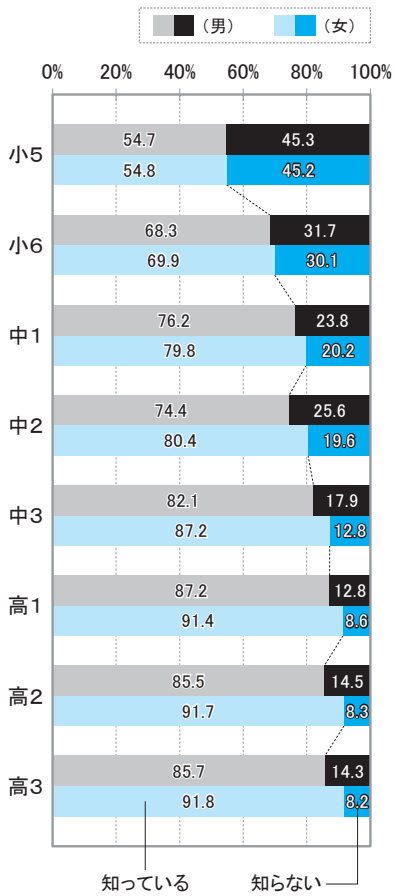
- 薬物を使った場合の例示されているいずれの健康影響についても「知っている」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなる傾向が認められた。また、その割合は、概ねいずれの学校種・学年でも女子の方が男子より高かった。
- 男女ともに高等学校1年生段階で概ね90%以上の生徒が知っていると回答した薬物の健康影響は、「依存症」、「幻覚や妄想」であった。次いで80%以上の生徒が知っていると回答した薬物の健康影響は、「急性中毒」、「禁断症状」であった。他の薬物の健康影響と比較して「急性中毒死」を知っていると回答した児童生徒の割合が最も低く、高等学校3年生男子で59.6%、女子で60.7%であった。

図Ⅱ-4-(4) 健康影響についての認識

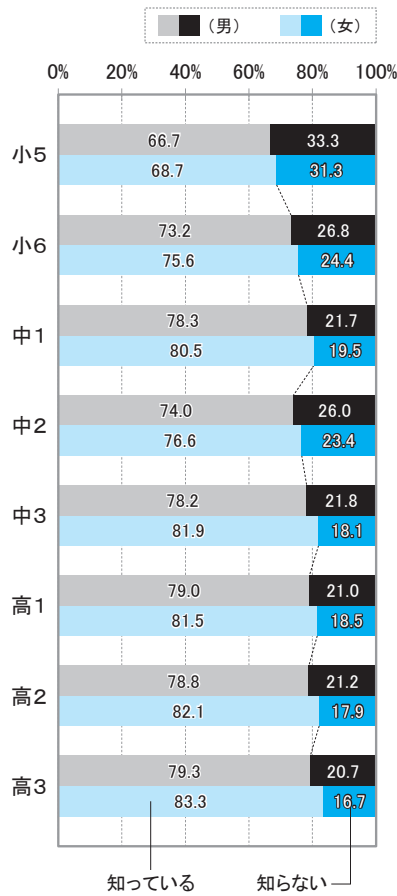




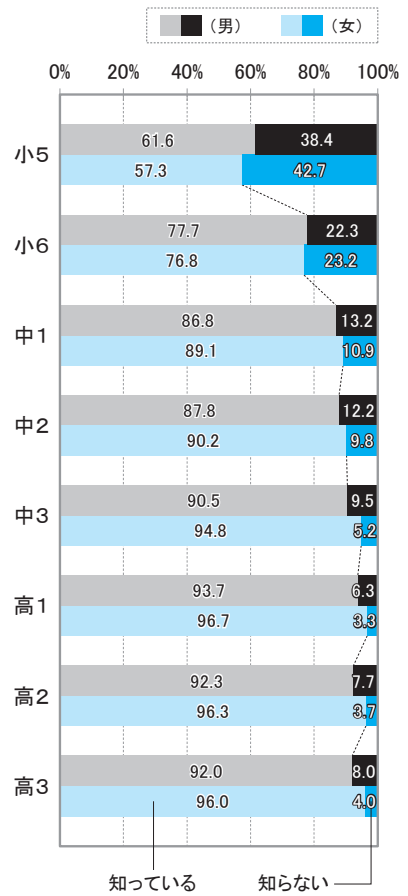
禁断症状



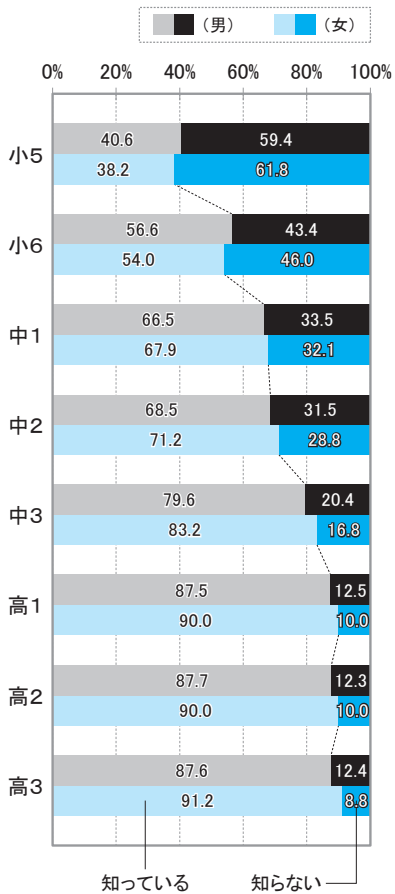
慢性中毒



幻覚や妄想



フラッシュバック



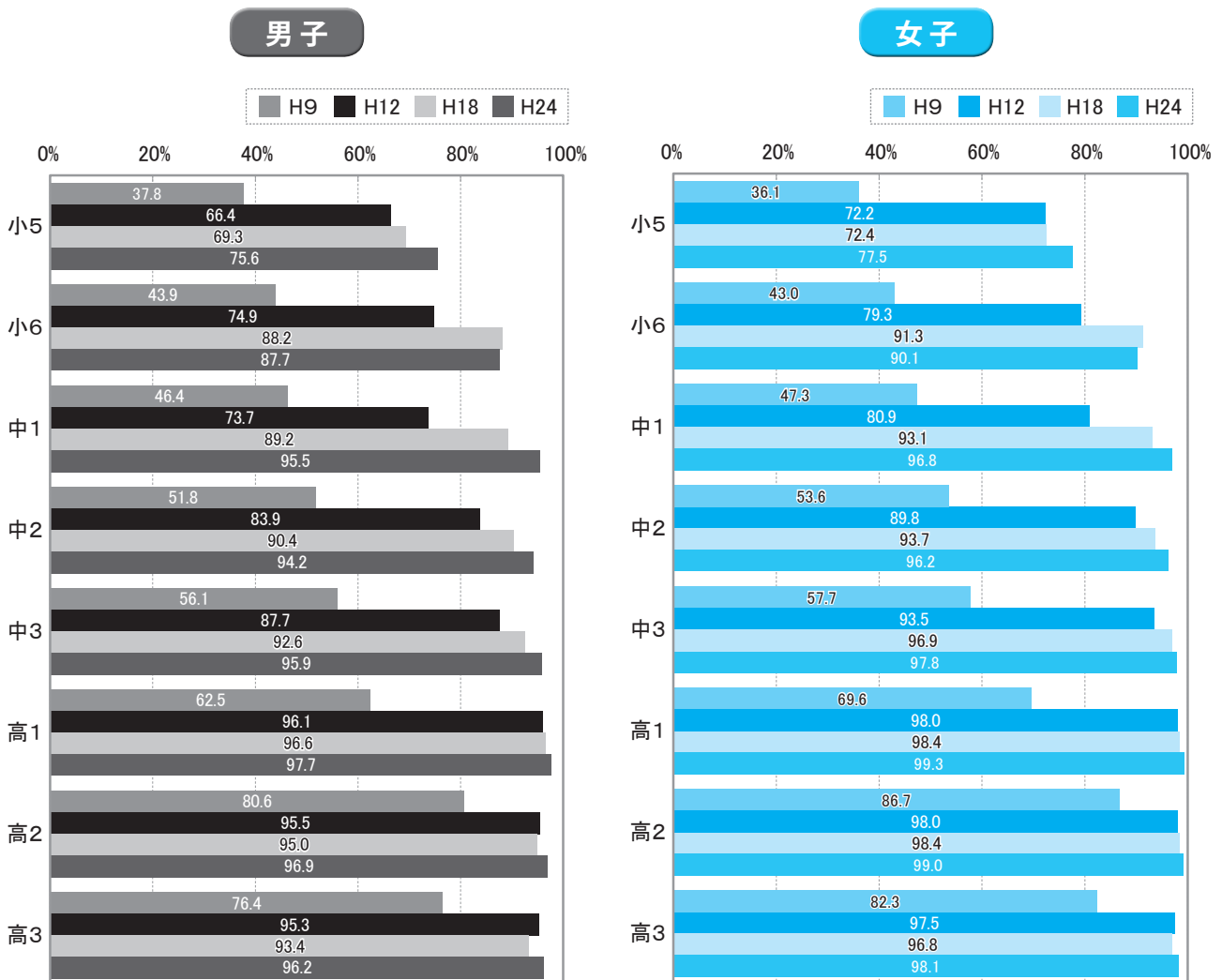
【参考】

- 平成9年、平成12年及び平成18年に実施した調査では、複数ある薬物の健康影響について「知っている」ものを選択する質問になっていたが、今回の調査では、薬物の健康影響についてそれぞれ「知っている」か「知らない」の二者択一とした。したがって、今回の調査結果と過去の調査を比較することはできないことから、過去の調査における薬物の健康影響についての認識に関する結果（第2章 p 118【参考8】参照）を参考として示す。

## （5）薬物について学んだ経験

- 「薬物について学んだり聞いたりしたことがある」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなり、中学校2年生男子（94.2%）を除いて中学校1年生以上で95%を超えていた。
- 「薬物について学んだり聞いたりしたことがある」と回答した児童生徒の割合は、平成9年と比較して平成12年の調査において明らかに高くなっており、平成18年の調査結果と比較すると、小学校6年生を除きいずれの学校種・学年においても上昇が認められた。

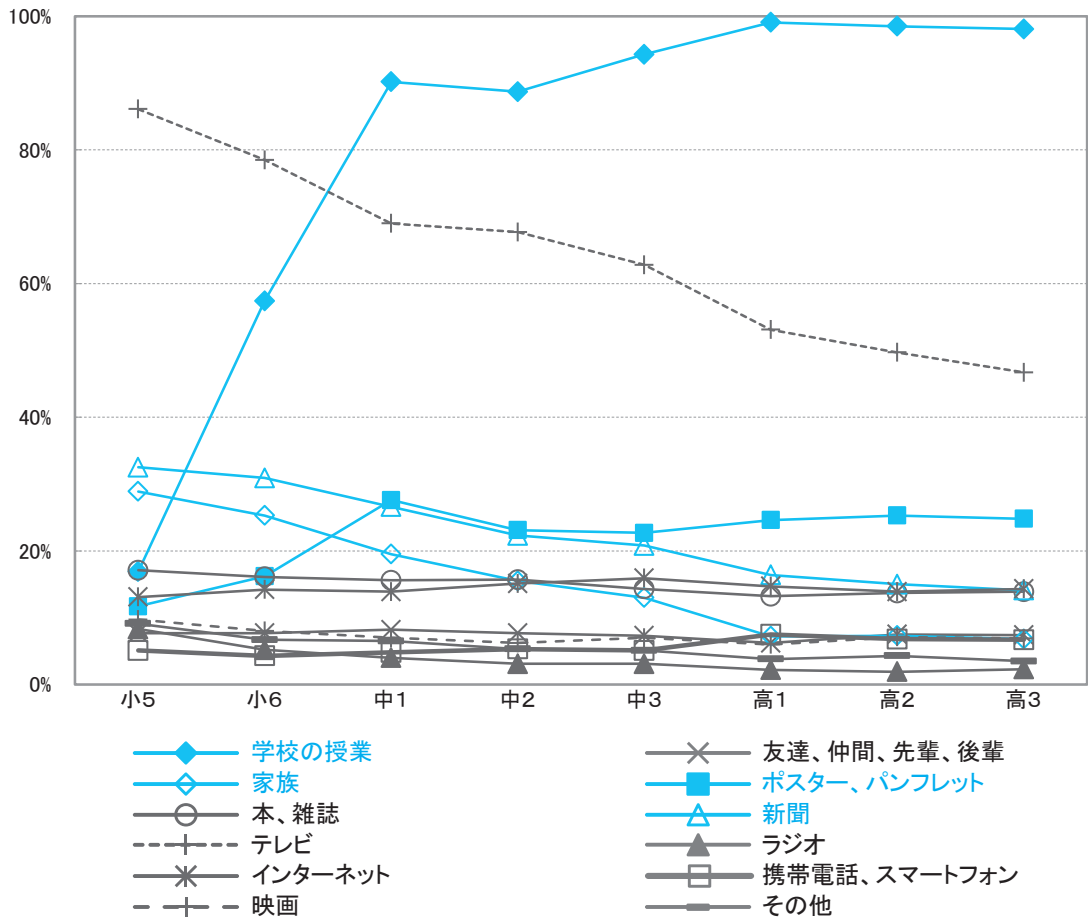
図Ⅱ-4-(5)-1 薬物について学んだ経験



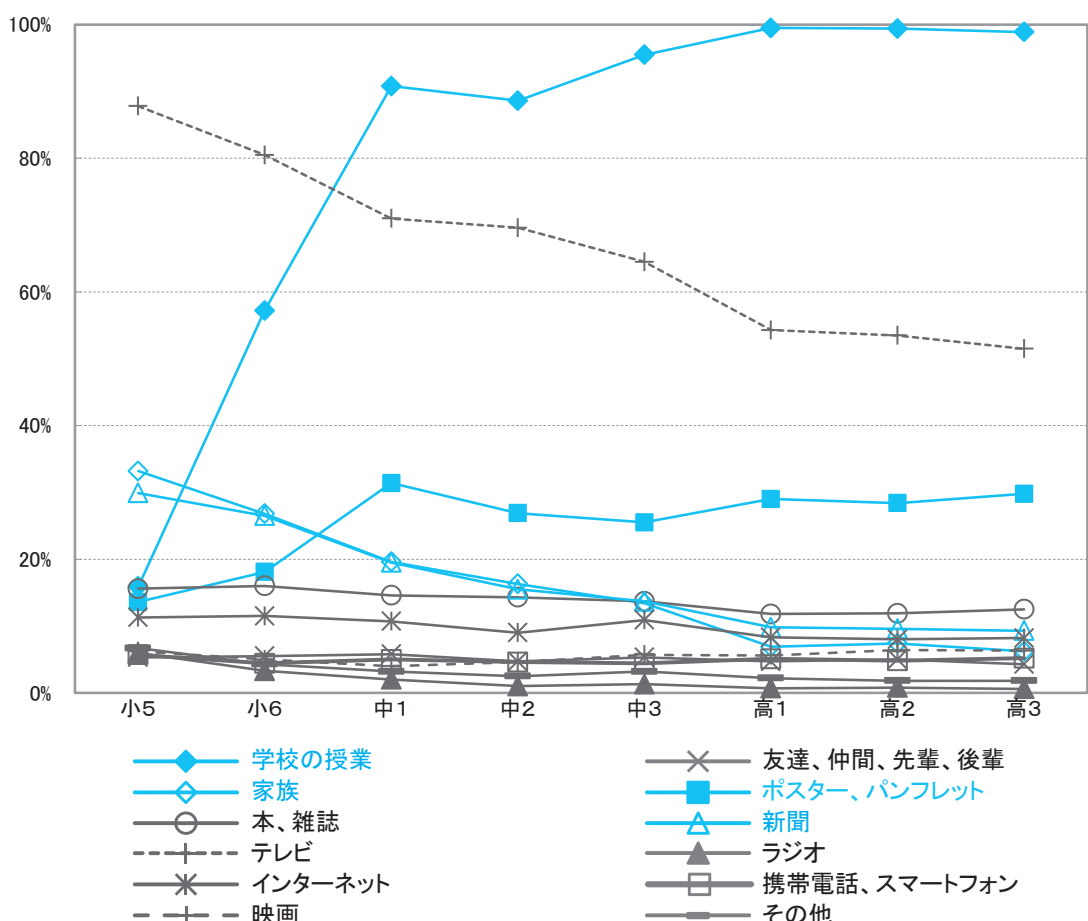
- 以下に薬物について学んだ経験のある児童生徒がどこで学んだかについての結果を示す。
- 男女ともに小学校5年生及び6年生では他の回答と比較して「テレビ」と回答した児童生徒の割合が最も高かったが、中学校1年生以降では、「学校の授業」と回答した児童生徒の割合が最も高かった。
- 「学校の授業」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなり、中学校1年生以降では90%を超えていた。一方、「テレビ」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなった。
- 男女ともに小学校5年生では「家族」及び「新聞」と回答した児童生徒の割合が約30%であったが、いずれも男女ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなった。

図 II -4-(5)-2 薬物について学んだ場所

男子

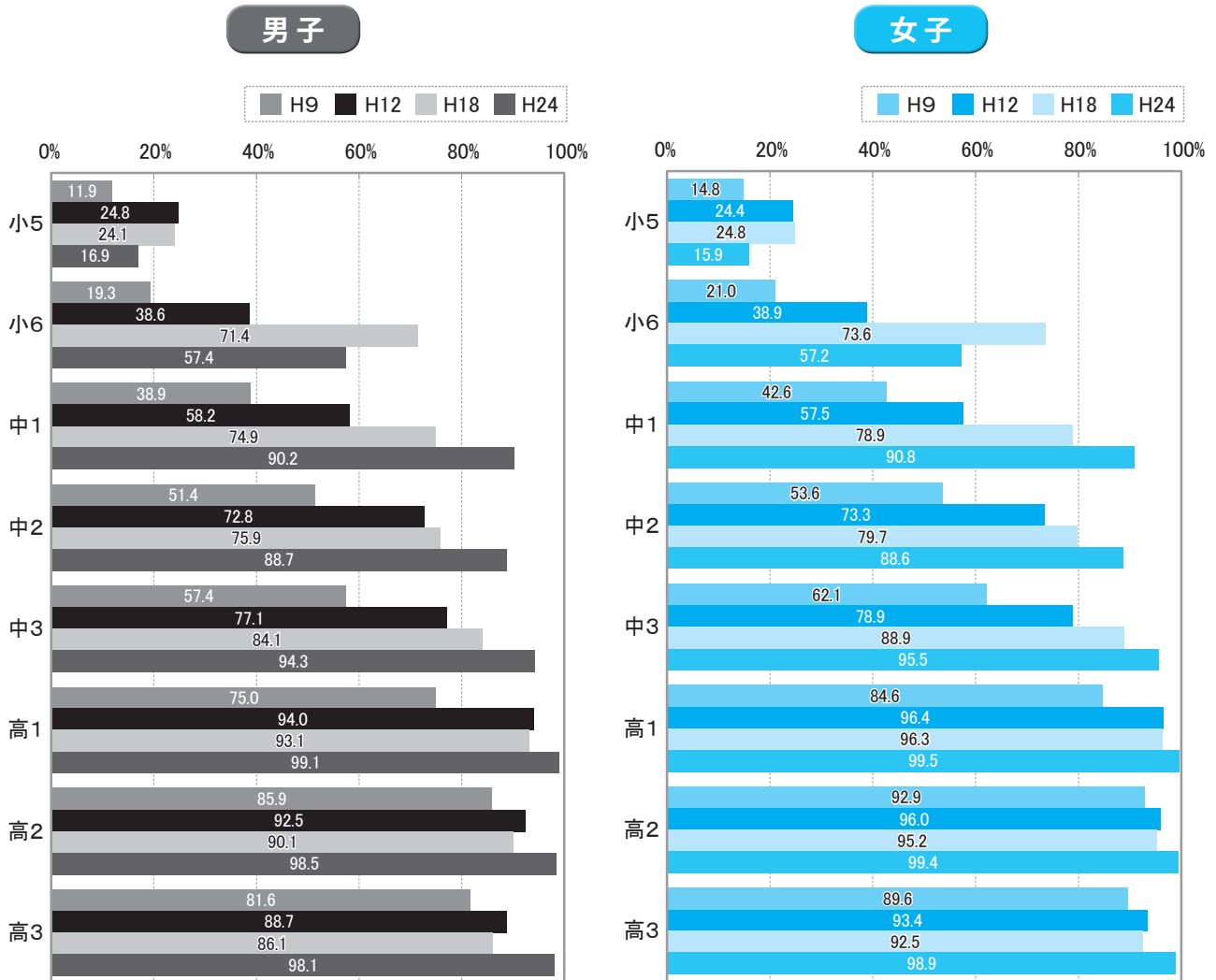


女子



- 「学校の授業」と回答した児童生徒の割合は、小学校6年生では平成18年の調査で大幅に上昇したが、今回の調査では低くなった。一方、中学校1年生以降では、平成9年から平成12年の間で大幅に上昇し、平成12年から18年では概ね横ばいであったが、今回の調査で高くなっていった。

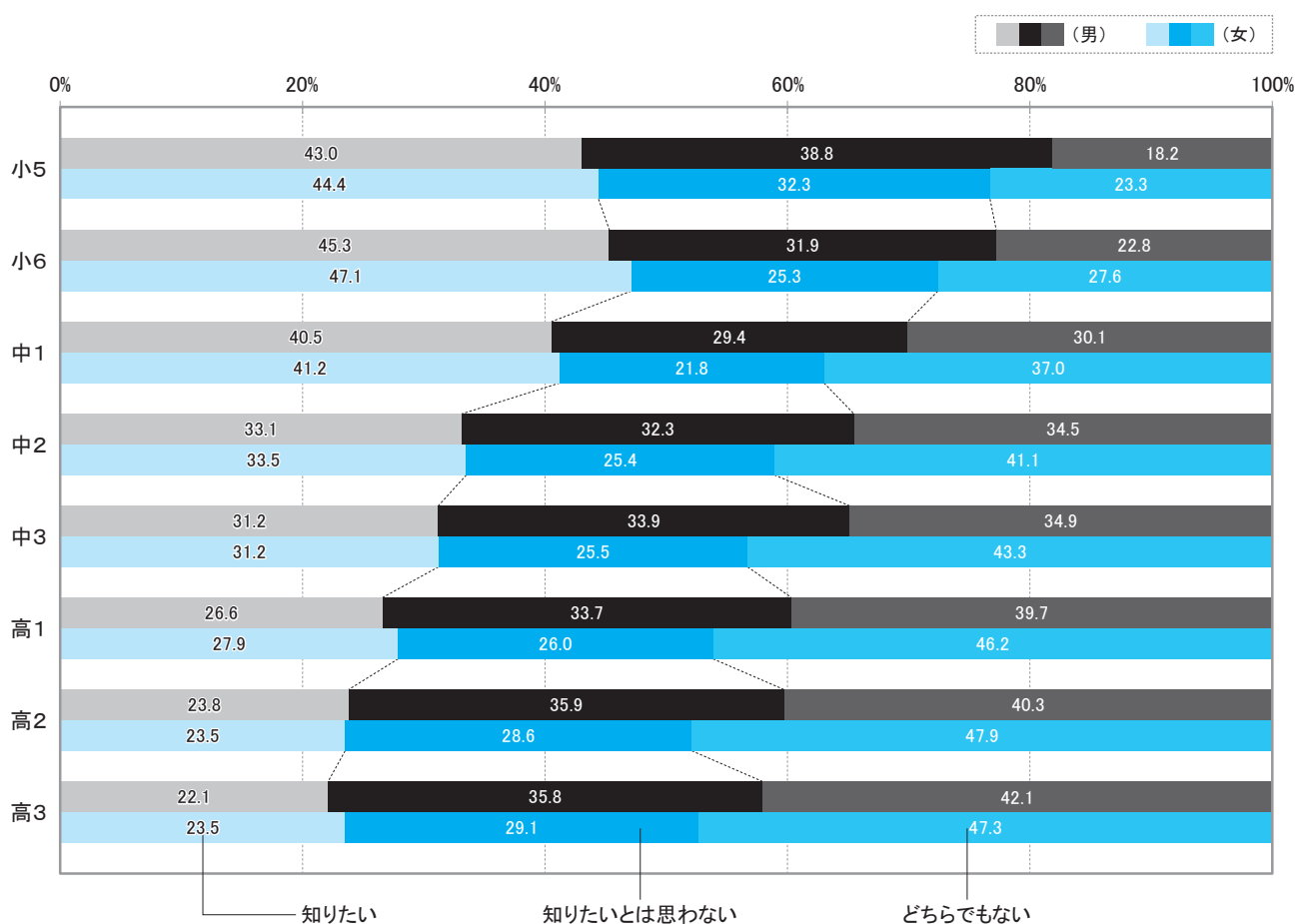
図Ⅱ-4-(5)-3 薬物について「学校の授業」で学んだと回答した児童生徒の割合



## (6) 薬物の有害性・危険性についてさらに学ぶことに対する考え

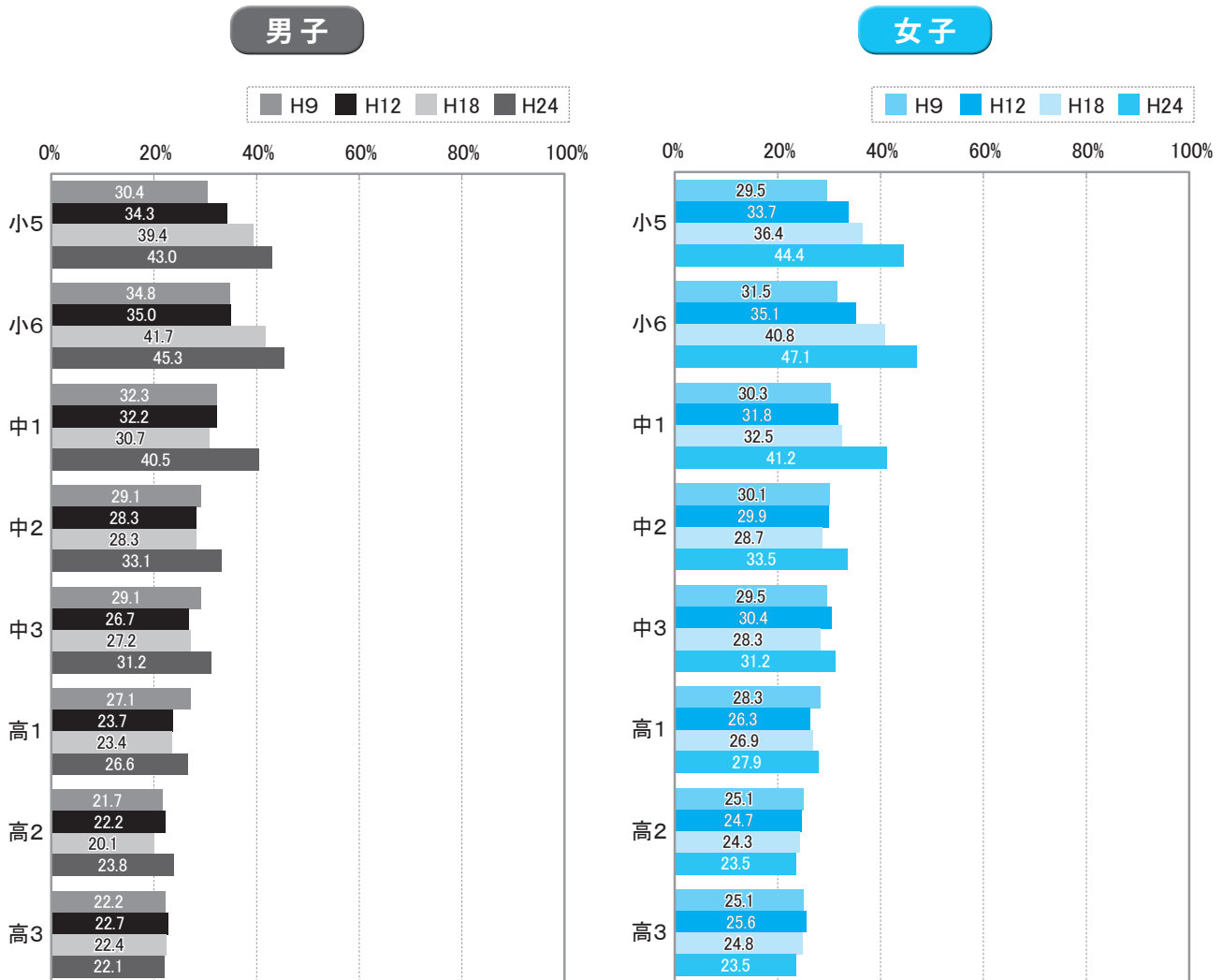
- 覚せい剤などの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）を「もっと知りたいと思う」と回答した児童生徒の割合は、男女間で大きな差が認められず、ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなった。
- 「もっと知りたいとは思わない」と回答した児童生徒の割合は、学校種・学年間で大きな差が認められなかったが、いずれの学校種・学年でも男子の方が女子より高かった。
- 「どちらでもない」と回答した児童生徒の割合は、学校種・学年が上がるにつれて高くなり、いずれの学校種・学年でも女子の方が男子より高かった。

図Ⅱ -4-(6)-1 薬物についてさらに学ぶことに対する考え



- 「もっと知りたいと思う」と回答した児童生徒の割合は、平成18年の調査結果と比較すると男女ともに中学校3年生までは高くなったが、それ以上では大きな差が認められなかった。

図II -4-(6)-2 薬物の有害性・危険性をもっと知りたいと回答した児童生徒の割合

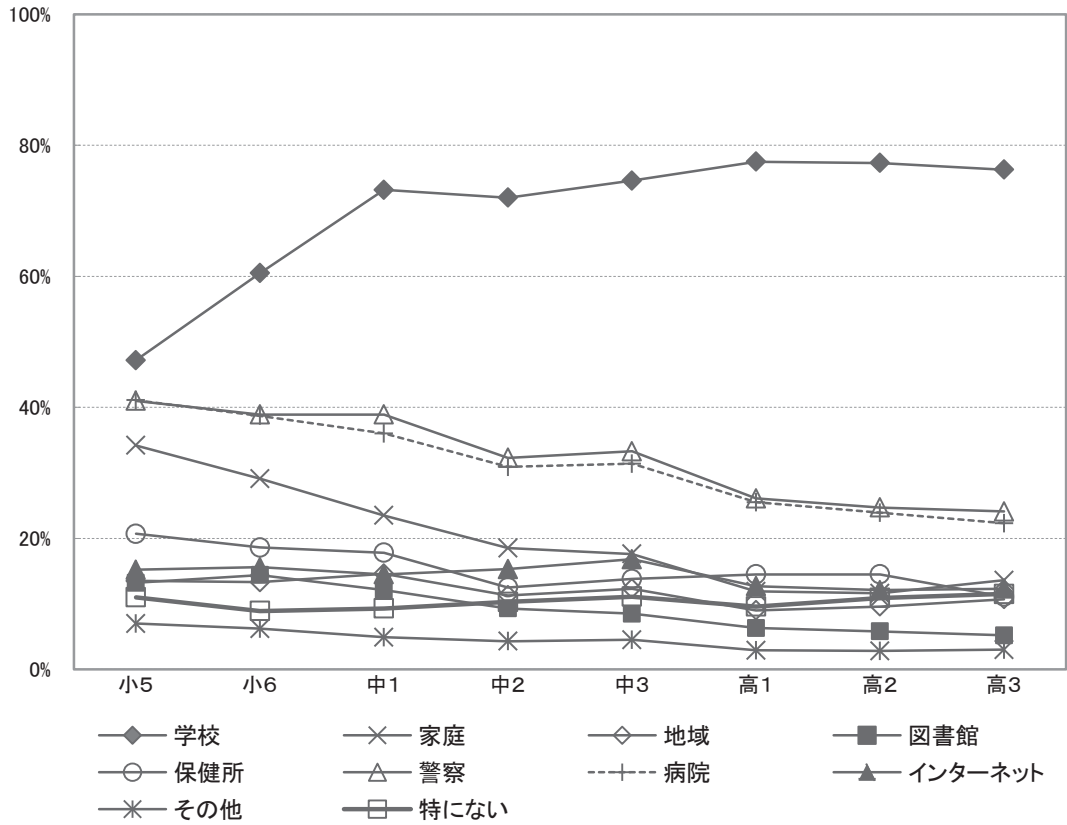


## (7) 薬物について学びたい場所

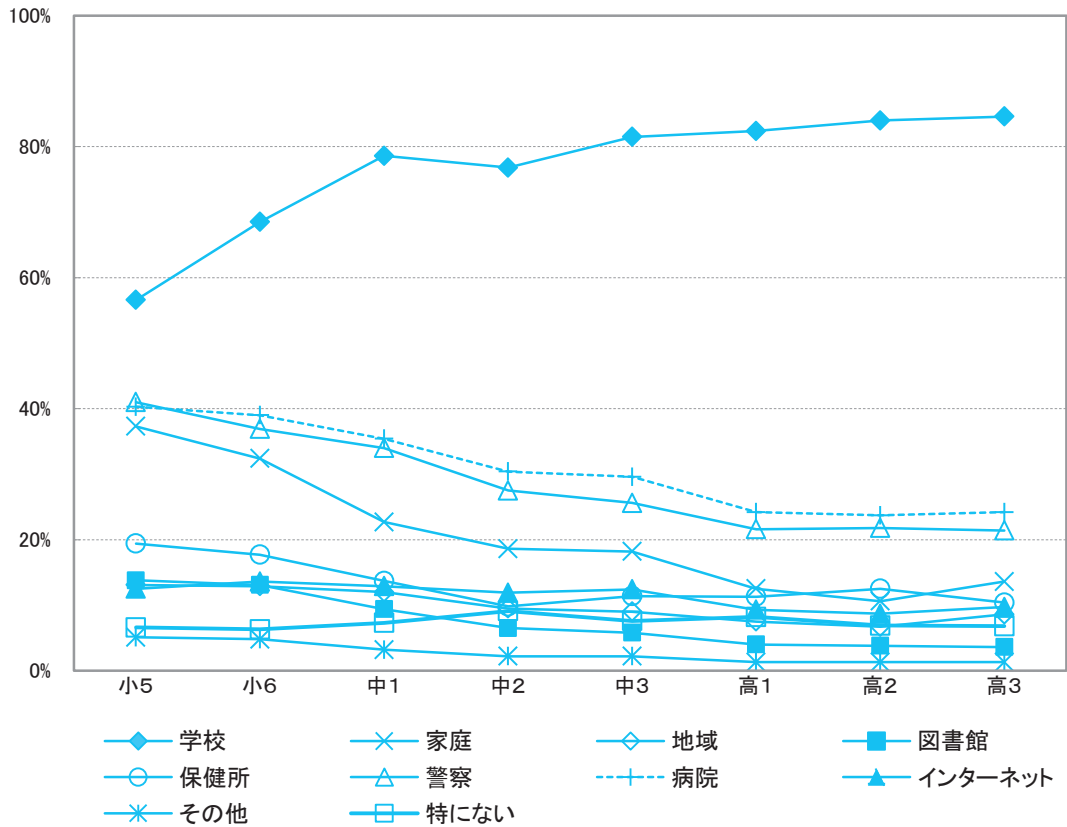
- 他の回答と比較して覚せい剤などの薬物を使った場合の心や体への害について学ぶのよい場所は「学校の授業」と思うと回答した児童生徒の割合が最も高く、次いで男子では概ね「警察」、「病院」、「家庭」の順であり、女子では「病院」、「警察」、「家庭」の順であった。
- 「学校の授業」と回答した児童生徒の割合は、概ね男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなったが、「警察」、「病院」、「家庭」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなった。

## II -4-(7)-1 薬物について学びたい場所

男子



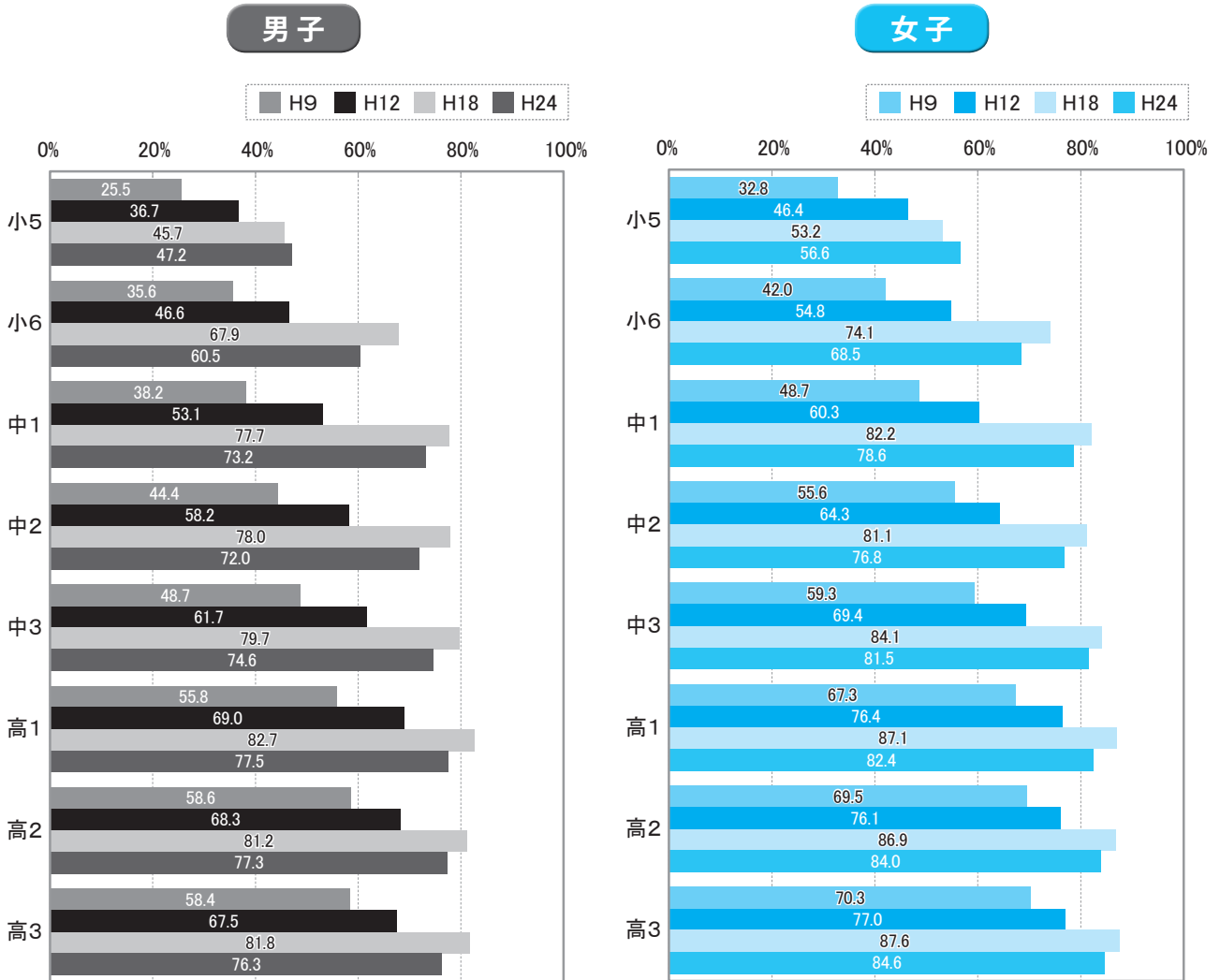
女子





●「学校の授業」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに平成9年から平成18年までの調査結果では段階的に高くなっていったが、今回の調査では平成18年の調査結果と比較すると若干の低下が認められた。

図II -4-(7)-2 薬物について学ぶ場所として「学校」がよいと回答した児童生徒の割合



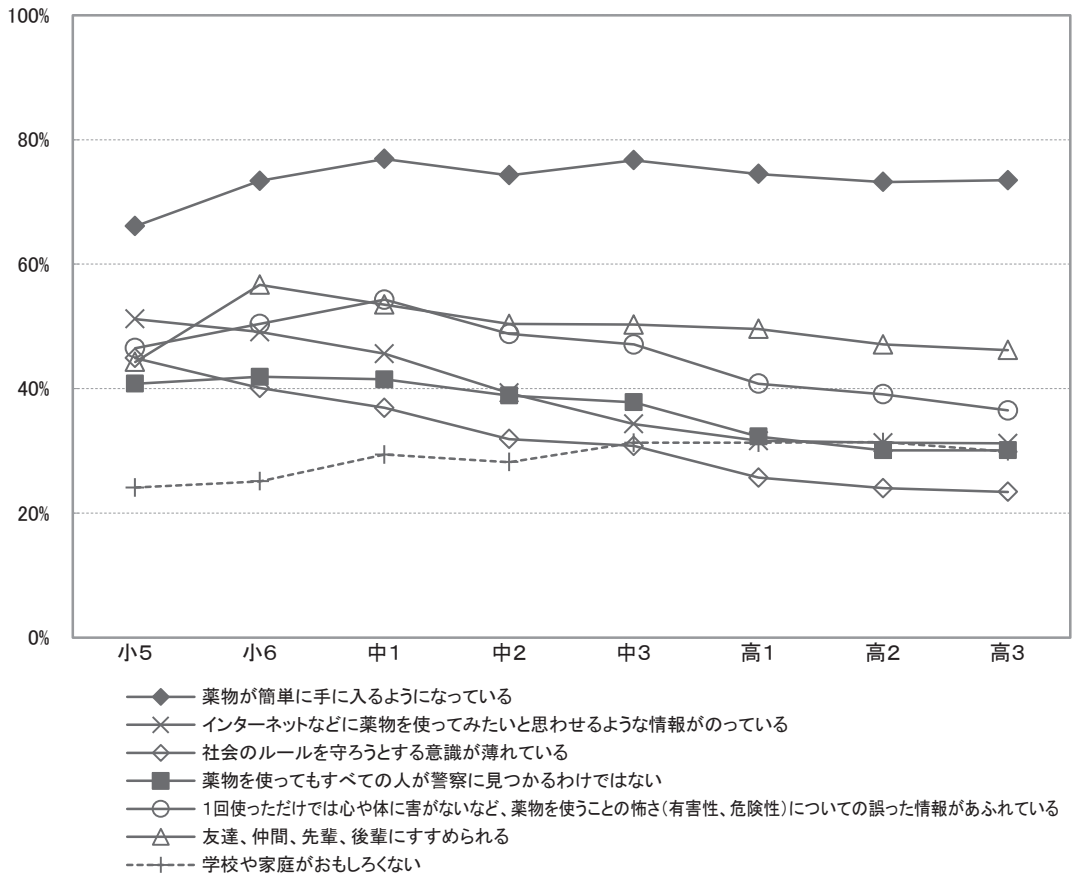
## (8) 薬物乱用が増えている理由に対する考え

---

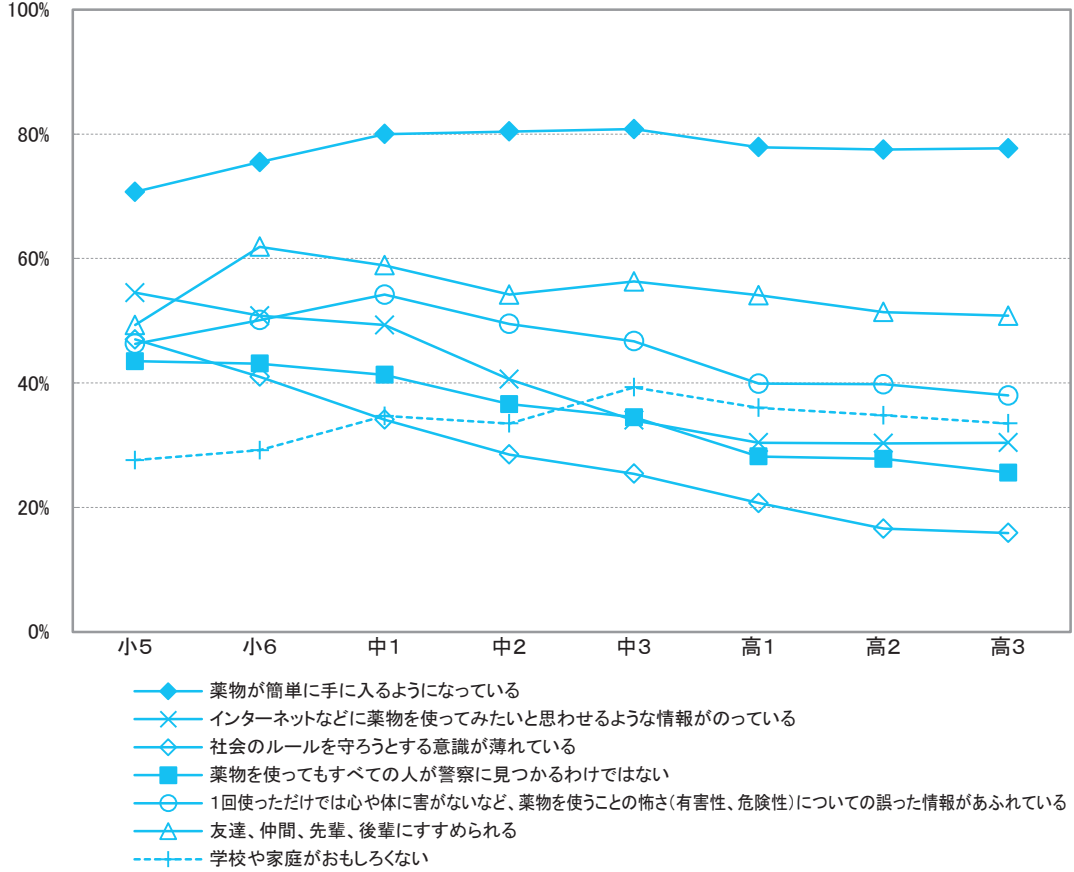
- 他の回答と比較して若者の間で大麻などの薬物を使う人が増えている理由として「簡単に手に入るようになっている」からと思うと回答した児童生徒の割合が最も高く、男女ともに小学校6年生以降70%を超えていた。次いで男女とも概ね「友達等に進められる」、「有害性・危険性に関する誤った情報の氾濫」の順であった。
- 「簡単に手に入るようになっている」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに小学校6年生以降学校種・学年間で大きな差が認められなかったが、「友達等に進められる」、「有害性・危険性に関する誤った情報の氾濫」と回答した児童生徒の割合は、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなった。
- 男女間で比較すると、「簡単に手に入るようになっている」及び「友達等に進められる」と回答した児童生徒の割合は、いずれの学校種・学年においても女子の方が男子より高かった。一方、「有害性・危険性に関する誤った情報の氾濫」と回答した児童生徒の割合は、男女間で大きな差が認められなかった。

図 II -4-(8)-1 薬物乱用が増えている理由に対する考え

男子



女子



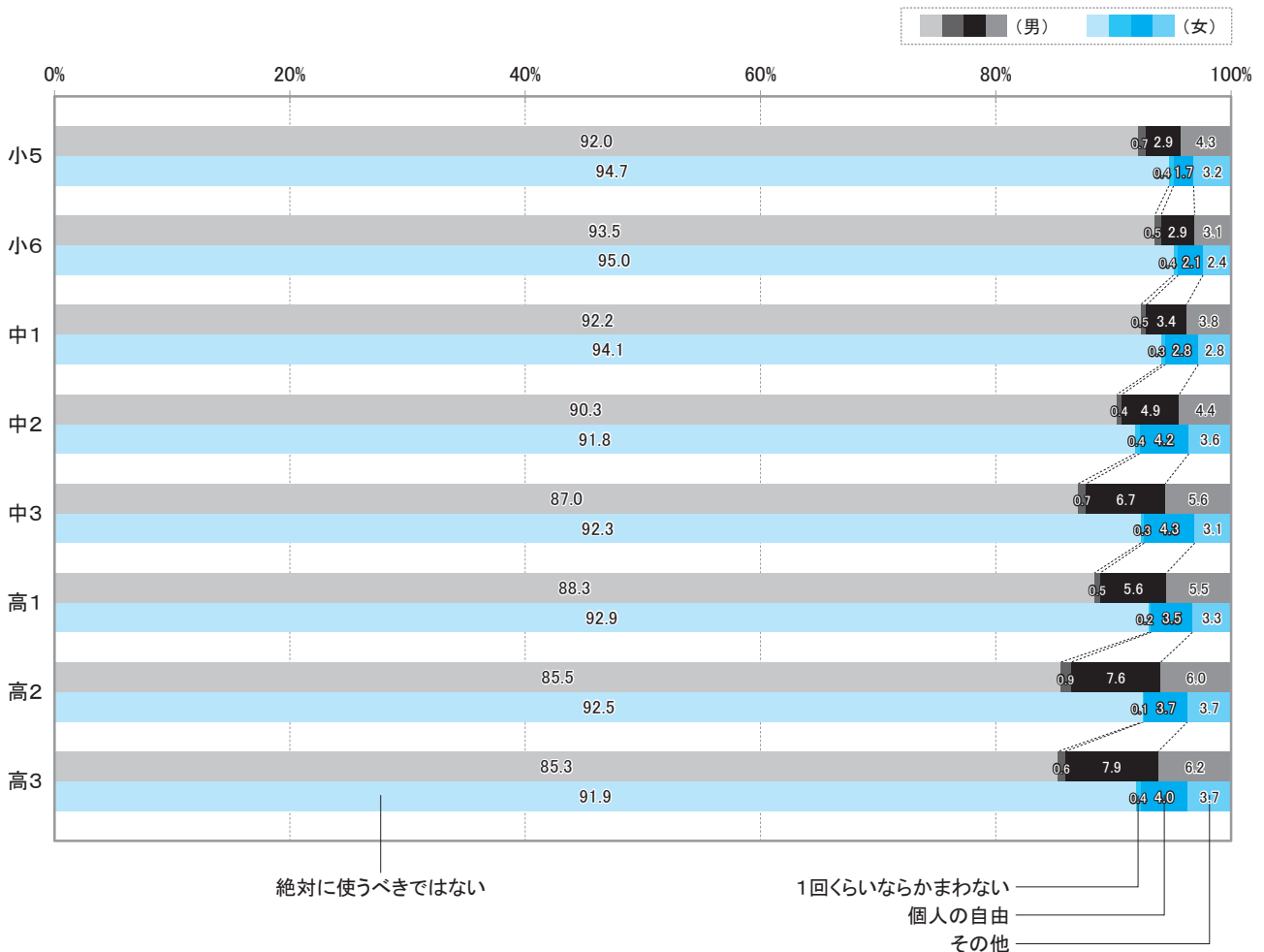
【参考】

- 平成9年、平成12年及び平成18年に実施した調査では、質問が「覚せい剤などの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思えますか」であったが、近年覚せい剤事犯が増えていないこと、大麻事犯に増加傾向が認められ、特に青少年の事犯の割合が高いことなどの社会状況の変化から、今回の調査では、例示を「覚せい剤」から「大麻」に変更した。「覚せい剤」の乱用と「大麻」の乱用では、児童生徒が受ける印象や考えが異なる可能性がある。したがって、今回の調査結果と過去の調査を比較することはできないことから、過去の調査における薬物乱用が増えている理由に対する考えに関する結果（第2章p124【参考9】参照）を参考として示す。

## （9）薬物の使用に対する考え

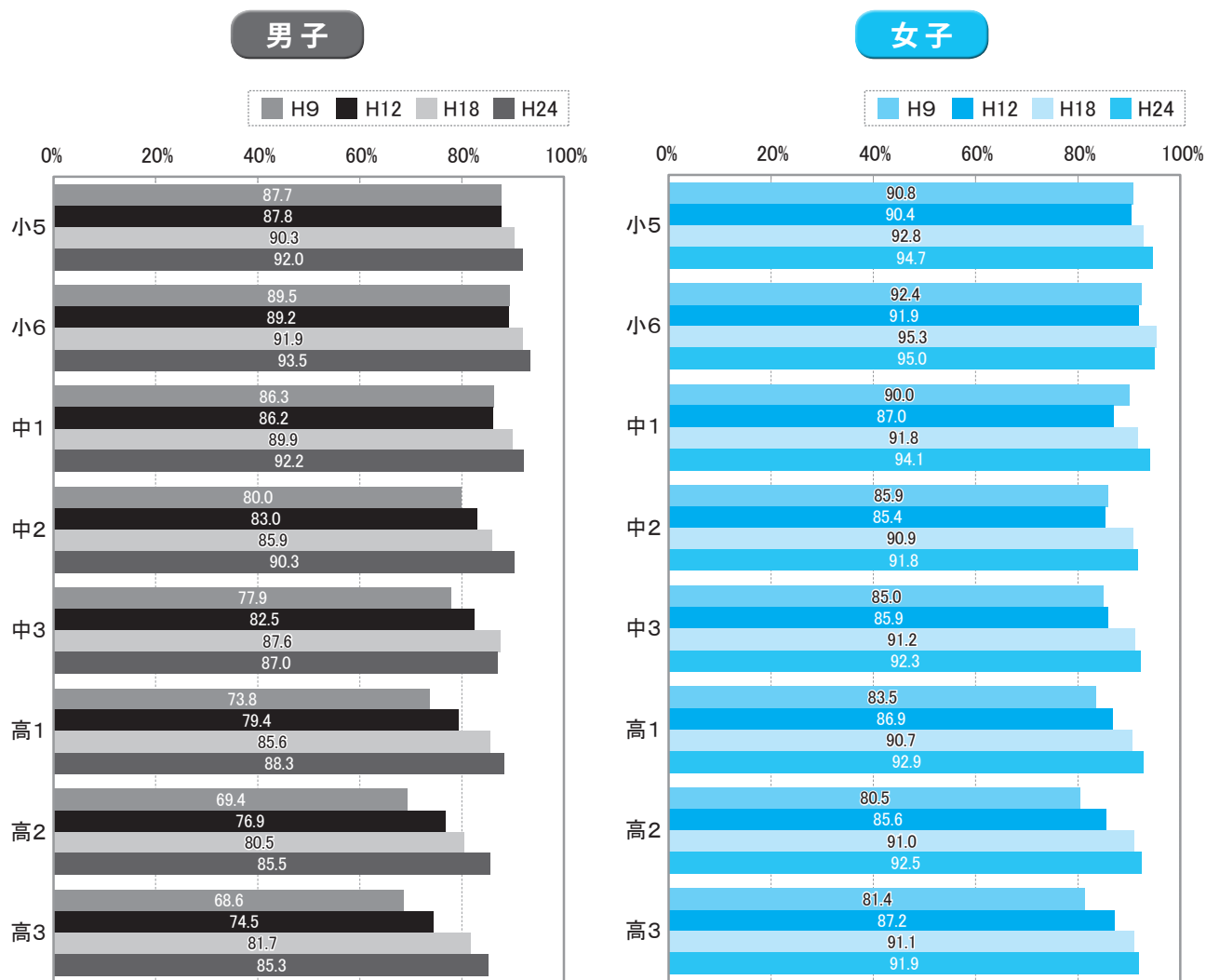
- 覚せい剤などの薬物は「どんな理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」と回答した児童生徒の割合は、他の回答と比較して男女ともにいずれの学校種・学年においても最も高かった。また、その割合は、すべての学校種・学年で女子の方が男子より高く、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて低くなり、最も低い高等学校3年生男子で85.3%であった。
- 「1回くらいなら心や体への害がないので、使ってもかまわない」と回答した児童生徒の割合は、極めて低く、男女ともにいずれの学校種・学年においても1%未満であった。
- 「他人に迷惑をかけていないので、使うかどうかは個人の自由である」と回答した児童生徒の割合は、すべての学校種・学年で男子の方が女子より高く、男女ともに学校種・学年が上がるにつれて高くなり、最も高い高等学校3年生男子で7.9%であった。

図 II -4-(9)-1 薬物の使用に対する考え



- 覚せい剤などの薬物は「絶対に使うべきではない」と回答した児童生徒の割合は、平成9年の調査以降男女ともに概ねいずれの学校種・学年においても段階的に高くなった。平成18年の調査結果と比較すると中学校3年生男子、小学校6年生女子を除き、概ねその割合は、高くなった。
- 「1回くらいならかまわない」及び「個人の自由」と回答した児童生徒の割合は、平成9年の調査以降男女ともに概ねいずれの学校種・学年においても段階的に低くなった。

図Ⅱ-4-(9)-2 「絶対に使うべきではない」と回答した児童生徒の割合



図II -4-(9)-3 「1回くらいなら使ってもかまわない」と回答した児童生徒の割合

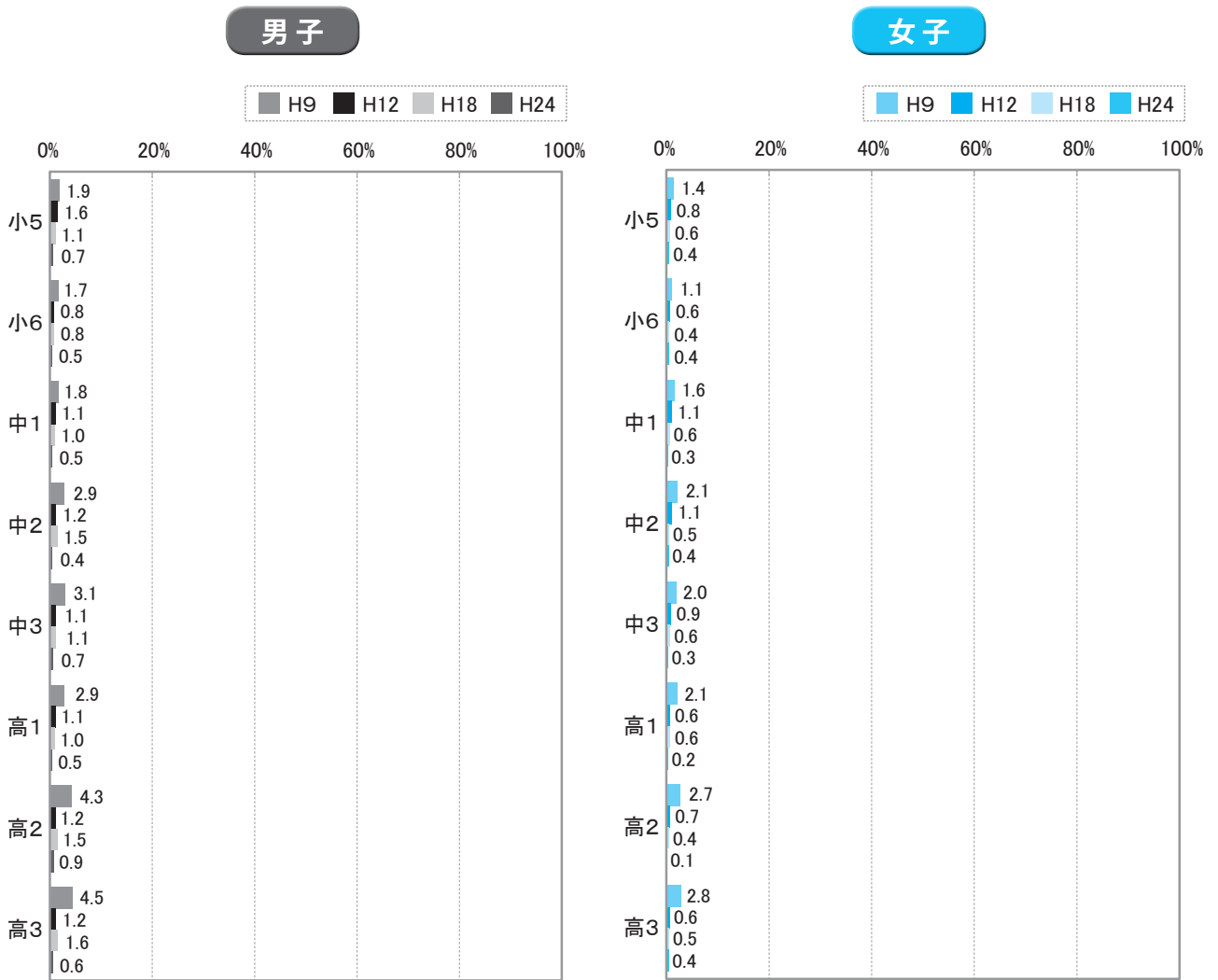


図 II -4-(9)-4 「個人の自由」と回答した児童生徒の割合

男子

女子

■ H9 ■ H12 ■ H18 ■ H24

■ H9 ■ H12 ■ H18 ■ H24

